

馬鈴薯を植えて一日老いるなり

令和二年 仲山 富夫

蜘蛛の糸弓形になり山囲う

青梅や小粒どうしで威張りおり

春蟬や埒無く湧きて消えさりき

七草粥孫の忘れし万華鏡

竹の子を掘る音ばかりの夜明けかな

庭火花親子の影をつくるなり

とうきびを半分食べて父母を待つ

盆踊り小さき悩みを片寄せり

淋しさや蛸どもの鳴き継ぐも

山椿陰も日向も深紅なり

日の残りうらなり南瓜の熟れるなり

夕暮れや翁の投網の型きまる

夕おぼろおうなの肩揉む影法師

生命なり踏ん張る子牛の湯気愛し

木洩れ日を受けて流るる枯葉かな

柿紅葉我が影追いつつ遊びおり

古戦場青首大根ばかりなり

蜘蛛降りぬ天上への糸紡ぎだし

我が影の畦にとまりて沢桔梗

ひこばえの田渋に写り雲流る

みみずなくという母の目の笑いおり

花すすき中山道を上るなり

三猿の苔纏いおり庚申塔

薄染の衣纏って大団扇

秋の野や鴉一羽の踊りおり

一頭の白蝶生まる子規の庵

童らは秋の斜陽の中に入り

夕月夜テトラポットの影濡れし

雷鳴や母の猫背の動かさり

名瀑や無限の音の乱れ打ち

こおろぎの慰めくるる一夜かな

ひよんの実を吹き鳴らし行く風の道

陽炎や親子の背中を撫せて消え

干瓢のむき終わるまで日が残り